

神奈川異グ連の活動状況を伝える機関紙 <第3号>

かながわ異グ連ニュース発行：神奈川県異業種グループ連絡会議事務局 芝 忠
〒231-0015 横浜市中区尾上町 5-80 神奈川中小企業センター 5F
TEL：045-633-5192 FAX：045-633-5194
Email：zan25564@nifty.com http://www.kanagawa-iguren.comちいき地域ちいき地域ちいき地域！！今月は「**地域**」に関する動きを3件お届けします！！地域ちいき地域ちいき地域ちいき**新しい「地域間交流」として、宮崎県都城市との交流が始まりました！！**

秋も深まった11月初旬「文化の日」前後の連休を利用し、宮崎県都城市に行って来ました。昨年10月に結成された新グループ：オールディーズシニアクラブ（古澤守代表）の都城訪問団に参加させていただいたものです。一行は19人でしたが、都城市の企業見学や観光スポット、温泉、ゴルフ（私はやりませんが）など満喫してまいりました。

11月2日～4日は、ちょうど同市のお祭りです。要所には多数の人が溢れていました。都城市は「ウエルネス都市宣言：人が元気、まちが元気、自然が元気」を標榜して14年目ということです。宿泊施設として市が作った「ウエルネスグリーンハウス」は大変すばらしい施設でした。霧島連峰の山麓で、高千穂峰が正面に見渡せるという立地環境がすばらしく、温泉もあり、また行きたくなる施設でした。

都城市域は、横浜市の約70%の広さで、人口13万2千人、農業粗生産額335億円（横浜市の約3倍）、工業出荷額は2190億円（横浜市の約4%）です。

今後の交流窓口として、都城市側は行政側として都城市産業部工業振興課・西川課長、民間側として(株)園田産業・牧元社長と暫定的に決まりました。神奈川側は、民間が古澤氏、行政側(?)が異グ連ということにしています。

都城市側は首都圏での物産の販売に期待しているようですが、人的・経営的交流もしっかりやらないと長続きしません。そのあたりは今後1年間で詰める事になります。
(芝 記)

四国・中国ブロックでの技術市場交流！！異業種交流の効果は、**地域**における経営人材の育成にあり！！

11月7日（木）愛媛県松山市にて「平成14年度、四国・中国ブロック技術市場交流プラザ愛媛大会」が開催され、170名が参加しました。

基調講演は東京異業種グループを指導している竹内俊明氏が「グローバル経済時代の地域中小企業経営―異業種交流を活用して経営革新にチャレンジ」と題して、最近の中国視察時の写真を多用して、日本の物づくりの変化と正攻法による経営革新を呼びかけました。

分科会は①異業種交流と経営革新、②異業種交流と産学官連携、③地域間交流で流通を考えるの3つで、私は第一分科会コーディネータを引き受けました。パネリストの愛媛の遠赤青汁(株)・高岡社長、香川のナベプロセス(株)・鍋坂社長、広島福徳産業(株)・細田会長が、それぞれ独自の経営理念、経営手法、技術開発、販売手法で全国展開している事例が報告され大変感銘を受けました。

全体会場で私は、分科会のまとめの一つとして「異業種交流の効果は、最終的には地域における経営人材の育成にある」と発言

しましたところ、多数の方から同感だとの声をいただき、意を強くしました。
(芝 記)

地域とともに人を育て中小企業が時代を創る！！

11月11日（月）には、神奈川県中小企業家同友会主催の“2002年全県経営研究集会”が川崎市産業振興会館にて、300名の参加で行なわれました。テーマは“地域とともに人を育て、中小企業が時代を創る”という大変共感を呼ぶものでした。

基調報告は愛知県同友会代表理事兼全国協議会幹事長の鋤柄(すきがら)氏で、30年前に2人で環境関連事業を立ち上げ、その会社経営の苦勞の中から理念づくりの必要性を感じ、今日300名の会社に育て上げたという内容でした。

分科会は4つでしたが、私は「地域経済活性化とまちづくり」に参加し、網島・元住吉・川崎北口・川崎東田の4商店街の活動を聞き、大変興味を引かれました。自分自身が元住吉に40年間関わっているので、消費者の立場と商店街振興が必ずしも一致しないということがよく分かりました。

去る10月16日（水）に渋谷で、広尾商店街の幹部を含んだセミナーに参加しましたので、異グ連懸案の「商業・流通プロジェクト」再開にむけた情報としていずれも大変参考になる経験でした。(芝記)

異グ連理事会が開催され、異グ連展望等の検討がされました！！

開催日時：H14年10月23日（水）pm3:00～5:00

開催場所：(財)神奈川中小企業センター 6F特別会議室

出席者（敬称略）：南出健一議長、尼野邦貞（朋友クラブ）、坂本徳博（IDEC）、石田静子（交流支援課）、竹沢佐知子（女性クラブ）、塚越幾信（KASIKO）、宮川豊（同友会）、八幡敬和（C&S）、吉野友邦（平塚異業種研究会）
芝忠（事務局）、渡部鉄夫（事務局）

<議事>

- 1、議長挨拶：ベトナム訪問及び最近の経済情勢について
- 2、芝事務局長：①異グ連の活動状況報告、②異グ連活動の展望について報告と質疑、③H15年度予算報告
- 3、参加各グループから活動状況紹介、情報交換を行なった。

(渡部 記)

第165回異グ連事務局長会議（月例）

開催日時：H14年11月11日（月）pm2:00～4:00

開催場所：(財)神奈川中小企業センター 5F会議室

出席者（敬称略）：佐々木哲夫（I&I）、魚崎誠也（C&S）、鉅鹿直賢（C&S）、大島芳則（朋友クラブ）、小沢裕司（KSSK）、八幡敬和（オールディーズシニアクラブ）、樺山敬彦（シフト21）、杉山嘉一郎（横浜ネットユニオン）、渡部鉄夫（KIK）、芝忠（事務局）

<議事>

- 1、議長挨拶：南出議長欠席（芝事務局長が代行）
- 2、異グ連活動状況報告
 - ① 11月7日四国・中国ブロック技術市場交流プラザ愛媛大会の報告（芝事務局長）
 - ② 11月2日～4日宮崎県都城市との交流訪問の報告（芝事務局長、八幡オールディーズシニアクラブ事務局長）
 - ③ H15年度異業種交流サミットの和和大会準備経過報告（芝事務局長）
 - ④ 来月のシンポジウム報告（医療福祉、新製造、環境）
 - ⑤ 「中小企業のための新事業開発“公的補助金”申請・獲得マニュアル」出版報告（芝事務局長）
- 3、出席グループの活動状況について情報交換を行なった。
- 4、その他 「シフト21」に関する問題点の話し合い・検討が行なわれた。 （渡部 記）

！！11月事務局スタッフ会議にて、異グ連行事の世話

役分担が再確認されました！！

<定例会>

- 事務局長会議 渡部
- 理事会 渡部
- 事務局スタッフ会議 渡部
- 交流アドバイザー会議 小野川
- 通常型コーディネーター会議 渡部
- 中小企業問題懇談会 芝

- 中小企業政策研究会 島津（俊）
- INF 志村

<その他行事>

- 都城市交流担当 芝
- テクニカルショウ横浜 飯島
- ビジネスオーデイション 根岸

<その他庶務管理>

- 補助金グループ準備作業 小野川、相楽
- 異グ連ニュース発行作業 小野川、相楽
- 異グ連ホームページ管理 高木
- 会員管理 河村 （小野川 記）

当面の主な日程は次の通り

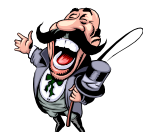
- <11月> 11月24日（日） 神奈川県商工交流会（芝）
- 11月25日（月） INF企画会議：第4回全国大会（東京北区）のフォロー等（芝、志村）
- 11月27日（水） コーディネータサミット（全日空ホテル）
- 11月28日（木） シンガポールプロジェクト定例会
- <12月> 12月02日（月） 異グ連事務局スタッフ会議（am10:00~12:00）
- 12月06日（金） 異グ連交流アドバイザー会議（pm1:00~3:00 6F特別室）
- 12月09日（月） 医療福祉コンソーシアム
- 12月10日（火） 新製造コンソーシアム
- 12月18日（水） 環境コンソーシアム



異業種交流専門家育成講座

異業種交流スキルアップ及びプロの育成の一環として、第一線でご活躍のコーディネーター及び経験豊富なベテランの方に毎回登壇願ひ、実績・経験に基づいた持論を展開いただきます。

第3号はお待ちかね根岸良吉先生に、最近、話題にはなるが今ひとつ推進力に欠ける産学連携について、持論を展開いただきました。



私の異業種交流論（第2回）

根岸良吉

産学連携が「物真似」だとすでに述べた。米国は中小企業政策の中に、大学の研究成果を中小企業の発展の栄養源として活用し、復活を果たした。日本の産業活力が中小企業の活力に源があると解明した米政府の産業振興策の一つが、中小企業の産学連携である。それが成功したのは米国の社会システムが機能したからである。その社会システムが異なる日本でそのまま産学連携を行っても機能する筈がない。まず第一に人の流動性が全く異なる。米国では頭脳の移動が自由である。この点、日本は組織に縛られて動きが取れない。また、投資についてもハイリスク・ハイリターンが当然と考える米国流とノーリスク・ハイリターンを望む日本では産学連携のインフラが整備されていないのである。経験をお持ちの方もいるかと思うが、中小企業振興施策を活用しようとしても資金的な面では公的資金を含めても利用し難いのが普通である。また、新しいものも海外で評判にならないと日本国内では普遍化しない例が多い。

さらに産学連携というと企業と大学との共同研究、委託研究に課題が絞られてしまっていて、技術や経営の相談・指導はどちらかと言えば除外されている。また、課題についても学と産の学術の面でのレベルやステップの差を埋める方策が準備されていない。大学と対等、ないし小差で連携できるのは大企業の研究開発部門と一部の中堅企業のみと言って差し支えなからう。大学と中小企業との格差をどのようにして解消、または縮小するのかの方策は個々に任ざられてしまっている現状をどうするのか、何の方策も採られていない。具体的に利用するには種々の制約があることも実際に経験して困惑することが多い。

大学も社会情勢というより経済情勢の厳しさから維持運営に汲々としており、外部からの資金導入に熱心になり、その一つの手法として産学連携に飛び付いている傾向が見られる。言い換えれば産・学・官が産学連携の同床異夢の中にあると言っても可笑しくあるまい。

現在の状況の中で産学連携を具体化するには学の積極的な異業種交流への参加が望まれる。今までのように座して客を待つ姿勢でなく、中小企業と同じ目線で課題に取り組む態勢を持つべきであろう。大学は研究者の置屋ではない。TLOは研究者の売り込みに積極的になるべきである。ただし、大学には大学としての存在理由があり、その存在を危ふくすることは許されない。この点がTLOの役割でもっとも難しい問題であろう。しかし、このような問題に意外とTLO関係者は留意していないように見うけられる。筆者の僻目であれば幸いである。それでも最近では大学の先生方の中にも異業種交流に積極的に参加される方も増加しつつあるが、まだ、中小企業側から見れば隔靴搔痒の感があることは否めない。特に大学の先生方には企業側で重要視する時間軸に対して無頓着の場合が多過ぎる。経営の感覚が判らないことが原因であろうが、これには企業側がガッチリした計画を示す必要がある。

実際に異業種交流活動をしていて問題になるのは、具体的に実施している事業が、企業活動にどのように寄与するのか不明であり、自社のステイタスとして企業活動の中のほんの一部でしかないケースが非常に多い。事業経営は「もの」でも「サービス」でも「売ってなんぼ」の世界である。自社の経営に利することが大事である。この自明の理が実行できるように異業種交流活動は運営されなければならないし、利用すべきである。それにも関わらず産学連携では「ものづくり」に集中して、企業の経営に寄与する大学の経済、経営の部分の関与が非常に少ない。これは大学側の意識の問題より、企業側及び異業種交流グループ側の意識、認識の不足であろう。これは産学連携が始まった時、大学の科学技術力を活用することに集中しすぎていたことに原因があり、その考え方、見方が一般化して、産・学・官の世界で常識化してしまっていると思われる。この意味で異業種交流活動のあり方を足元から見直す必要があると筆者は考えている。本来それぞれが独自の運営が当然であるべき異業種交流グループの運営が何かパターン化してしまっているばかりでなく、グループ運営に支援のための行政の関与があるとパターン化せざるを得なくなっていることも一つの大きな要因であろう。

事業そのものは独立して存在するものではない。種々の分野や他の事業分野と連関して成立するものである。ハードとソフトの組合せの結果である。このことが結構見落とされているか、軽視されているのではないか。2002年度のノーベル物理学賞の対象となったニュートリノ天文学も浜松ホトニクス光電変換技術と三井金属鉱山の採掘廃坑の活用があったればこそである。いくら小柴先生のアイデアが優れていてもこれらの協力無しにはノーベル物理学賞受賞は存在しなかったであろう。もちろん、海のものとも山のものとも判らない研究に予算を付けた予算主任の協力も見逃せない。このことを学術の分野だから当然と考えるのは連関を考えない愚人である。芸術は芸術家個人の能力の成果だとよく言われるが、絵を作成するには絵筆、絵の具、キャンパス、パレットが必要で、それらの良し悪しで芸術の価値が左右されるし、名演奏家もそれなりの名器でなくては本来の名演奏は不可能なのである。

産学連携を効果あるものにするには企業側が大学に擦り寄るのではなく、大学側が異業種交流活動の中に飛込んできてくれることが重要なファクターになると考えている。それには教育行政による大幅な規制緩和が必要であろう。

しかし、意識も立場も異なる個が集まってグループが形成され、個別の事業の発展を望んで日々の活動が行われているのと並行させながらグループ活動を継続的に実行することは相当の努力を要するものである。そのような環境のもと、柔軟で円滑なグループ運営を実行するにはコンサルティング、アドバイジング、コーディネーションの力が現状では絶対に必要である。この3者を兼ね備えた人材が得られれば異業種交流活動は大きな成果が得られるであろうが、まず、存在しないだろう。とするならばそれぞれの専門性を持った複数の人材の組合せが次善の策となる。これをできない相談と決めつけるか、何とかしてその方向に努力するかはグループ構成員の意識と意思の問題である。どんな結果になろうともグループの自業自得と観念することが求められる。このような時、混乱の元になるのは理性と感情の衝突で、再生するか、破滅するかはグループ自身の問題である。少なくとも他力本願でなく、自力本願で解決せざるを得ないものである。

異業種交流は自社の発展のためのツールであり、企業間連携を確実にするためのソフト手法である。参加することに意義のあるオリンピックとは全く異なるのである。成果を得るためにはそれだけの何かを代償として提供することが必要であることは社会の常識である。ボランティアは特定の条件下でしか成立しないことを改めて承知しておくことが求められる。

繰り返しになるが、私の異業種交流論の結論として

- 「異業種交流は自社の発展のためのツールである。」・ツールは道具である。その遣い方を誤れば逆効果となる。
- 「異業種交流は仲良しクラブではない。」・仲良しクラブで良ければ気の合う者同士の方が楽しめる。
- 「異業種交流は競争と協調の場である。」・メンバーはライバルそのものであると同時に支援者でもある、ケース・バイ・ケースで変化する。
- 「異業種交流そのものは目的ではない。」・目的と手段との違いを忠実に意識する。
- 「異業種交流ではメンバー各自が独自性を持つこととそれぞれの独自性を尊重することが基本である。」
 - ・独自性は ONLY ONE である。No. 1ではない。
- 「異業種交流活動の円滑化には感情論の入らない論理性を持った自由な意見の交流が必要である。」
 - ・論理性と情緒性の違いを認識する。ビジネスは論理が優先する。

少し、冗長になった嫌いがあるが、一方、舌足らずのところのある首尾一貫しない文になったことを自己批判してこの項を終わる。最後まで読み通して頂いたことに深謝する。

.....

根岸先生の異業種交流への熱い思いが感じられる論評でした、有難う御座いました！

次号（第4号）は、島津龍男先生の「異業種交流早わかり」という成功のコツを論じていただきます。乞うご期待！（編集子）

